

ア・プリオリな総合的判断の変貌——フッサールとシュリック（1）

Husserl and Schlick on synthetic a priori(1)

高橋 克也*

Katsuya TAKAHASHI

序 「形而上学に敵対する分子」

1936年6月22日、ウィーン大学構内の階段で、講義に向かう途中であった一人の哲学教授が射殺された。ウィーン学団の指導者にして論理実証主義の代表的担い手として知られていたモーリッツ・シュリックである。シュリックの胸に四発の銃弾を撃ち込んだのは、精神異常をきたした元教え子のヨハン・ネルベック博士（当時32歳）であった。この事件が注目に値するのは、ウィーン公衆のシュリック教授に対する同情がさほど時間の経たぬうちに沈静し、むしろ殺人者を讃える空気が支配的となったと伝えられている点である（Gadol,1982,p.5）。そのような空気の生まれた理由は、ナチズムがオーストリアでも勢力を得ていたこの時期、ユダヤ的であるとみなされていたウィーン学団のボスが排除されたことが、歓迎されるべきことであったからだ。シュリックはユダヤ人ではないが、ウィーン学団にユダヤ人メンバーが含まれていたことは事実である。シュリック自身がユダヤ的とみなされた理由は、モーリッツという名前がオーストリア人の耳にユダヤ的に響いたということにもあるらしいが、何よりもシュリックの哲学

が著しくニヒリスティックなものと知識人たちに受けとめられていたことにある。事件の翌月、カトリック・ナショナリストの新聞『Schönere Zukunft（よりよき未来）』に載った「アウストリアクス教授」という偽名の筆者による記事は、次のように事件を批評している。「この弾丸は狂人の論理によって一人の犠牲者を求めたのではなく、おそらくは人生の意味をだまし取られた一箇の魂の論理によって、犠牲者を求めたのである」と。なにしろ、神の存在、魂の不滅といった言葉は、シュリック教授によれば意味のない言葉であり、その種の問題を論ずるいわゆる形而上学なるものは無意味な語からなる不可能な学問であるというのだから。このような破壊的な教説を聞かされることで傷ついた純粋な魂が、自己の存在を証明すべく実力行使に出たのだ、と「アウストリアクス教授」は言うのである。さらに、そもそもシュリックは哲学者ではなく物理学者だったのであって、唯物論者でもあったのであり、哲学者としての彼の仕事は哲学を「無へと解消する」ことであつた、と話は続けられる。かつてウィーン大学において物理学者エルンスト・マッハが占めていたポストを彼が占めることになったのは、その経歴と唯物論的姿勢のゆえであり、それだからまた、シュリックがウィーンに赴任するや「形而上学に敵対するあらゆる分子」、とりわけユダヤ人とフリ

* たかはし・かつや
埼玉大学准教授 近代ドイツ・フランス哲学、認識論

一メーソンがその周りに集まったのも不思議ではないのだ、と¹。

シュリックが実際に負っていたかもしれない政治的背景については、深入りすまい。ここでは、上の記事に極端な仕方で見られている、哲学をめぐる当時のあるイデオロギー的対立を再認識することから、私の関心事である「ア・プリアリな認識」の二十世紀哲学における展開という問題について、総括のための視点を得たいと思うのである。そして、シュリックという哲学者は対立のもっとも重要な当事者の一人であったがゆえに、シュリックを一つの軸として二十世紀前半の「ア・プリアリ」論の見取り図を得ようということなのである。

上記の記事において最大の問題となっている宗教と反宗教の対立を、取り上げようというのではない。また、「アウストリアクス教授」の記事の節度のなさ、そしてシュリック哲学への無理解については、カトリックの知識人の側からも「カトリック精神に反する」という抗議の声明が出された事実を、念のために書き添えておく²。私が問題にしたいのは、哲学と科学の葛藤である。この記事においては、反宗教的な教育者シュリックへの弾劾と並んで、「物理学者」シュリックが哲学の教授ポストに座って「哲学を無へと解消する」ことに従事したということへの、反感が表明されていることが印象的なのである。

ここから分かるのは、宗教と反宗教の対立だけでなく、哲学と科学の対立も一つのイデオロギー的問題として当時の論壇を規定していたということである。「形而上学」という語は、言うまでもなく、神や魂に関する議論を指すだけでなく、伝統的には「存在論」や「第一哲学」と呼ばれてきたような哲学の核心的部門も指してきた。つまり、形而上学に敵対する者とは、宗教の否定者だけでなく、哲学を否定する者

も指しえた言葉なのである。

哲学と科学の対立といっても、両学科の内容同士が互いに矛盾しぶつかり合うという意味ではない。そうではなく、両者の関係をめぐるいわば学問観上の対立が問題なのである。一方の陣営は、哲学というものは実験、観察、調査などを行う実証的諸科学とは別の、独自の領域をもつ個の学問であるとする。しばしばこの陣営は形而上学の、あるいは少なくとも第一哲学の擁護という立場に立つ。他方の陣営は、物理、心理、生物、社会と次第に対象領域を拡大してゆく実証的方法の前に、今や哲学にはその固有の領域などほとんど残っていない、もしくは存在しないとみなす立場である。これらを両極とするアカデミズムの暗闘は十九世紀末から存在していたもので、二十世紀始め、特に哲学者たちの著作の中で明確にテーマ化してゆくことになる。

科学との差異化を通して哲学のテリトリーを確固たるものにしようとする前者の陣営の企てとしては、フッサールの現象学が代表的であろう。また、アカデミズム内部の議論を離れて知識層のもっと一般的な心性に目を広げてみれば、第一次大戦後のワイマール・ドイツにおける種の反科学的な心性の中に、科学から差異化された哲学を求める要求を見ることができる³。「アウストリアクス教授」の憤懣もまた、こうした時代の大きな潮流の一つのヴァリエーションであり、しかも俗悪な文脈における発現である。だからまた、この時代の哲学擁護派がみなナチズムと親和性があるなどと考えるべきでないことは、言うまでもない⁴。

他方、後者の陣営を代表する当時の思潮が論理実証主義であり、シュリックがその担い手の人であった。論理実証主義は哲学の意義や存立可能性を否定するわけではない。哲学が固有の対象領域をもつ学問であるということを否定

するのであり、その代わりに、哲学とは論理を駆使して行なう種々の活動であると考えられている。すなわち、さまざまな言明の意味を明晰化し、もって有意味な言明と無意味な言明の識別や、科学的認識の増進に寄与しようとするような活動であると (cf. Carnap, 1932)。こうして論理実証主義は、哲学を「無へと解消する」わけではないけれども、哲学から固有の領土を奪おうとするのであるから反哲学の使徒と言えるわけである。

両陣営の対立は、見ると哲学の領土を守る側が哲学の高い地位を守護する側であり、哲学から領土を剥奪する側は哲学の地位の相対的切り下げをはかる側であるように見える。事実、額面はそういうことになっていると言ってよい。しかしながら、シュリックの思想に実際に触れてみると、事はそれほど単純でないことが分かってくるのである。シュリックは確かに哲学に固有の領土を認めない。しかし、それが哲学を「無へと解消する」ことではないのはもとより、論理実証主義の公式的な要約とも異なって、哲学の地位の相対的切り下げをさえ意図していないように見える。シュリックの考えでは、哲学は固有の対象領域をもつ学問体系ではないが、しかし、今日でも依然として「学問の女王」と呼ばれてよいものだ (Schlick, 1930a, p.34)。なにしろ、学問の女王それ自身が「個の学問でなければならないなどとはどこにも書かれていないのだから、と。そして、哲学とはどの学問の「魂」(ibid.)にも関わっているようなある種の行為だ、と言うのである。してみると、彼においては、哲学固有の領土を否定することは、哲学者の行為の開放性や総合性に対する信念からの必然的な帰結なのだと行ってよかろう。次の節はそうした信念を明確に語っている部分である。

「諸科学の間に厳密な境界線をひき、たえず新たな学科目を分離させ、その自律性を証明しようとすることは、今日の哲学精神の欠点である。真の哲学者は反対の方向に進む。彼は個々の科学を相互に独立なものにしようとは思わないで、むしろ逆に、それらを統一し、融合しようと思う。つまり彼は、諸科学に共通なものが最も本質的であり、差異は偶然的なものであって、それは実用的な方法論に属するものだということを示そうとする。彼にとっては、永劫の相のもとにはただ一つの現実とただ一つの学があるだけである。」 (Schlick, 1930c, p.74. 邦訳27頁。)

このようなシュリックの信念と比べると、逆に、仮に形而上学なる学問が領土を得て見事成立するとしたところで、結局それは、科学の後に残された領土で自己のアイデンティティを養ういわば「個の学術的隙間産業にすぎぬように見えてくる。果たしてそのような学術が、「哲学」の名の由来である「智恵を愛すること」にふさわしい何かなのであろうか。

私が「ア・プリオリな認識」の概念小史を企てるにあたってシュリックを軸にするのは、シュリックの哲学観を通して見えてくるこの逆説、つまり、哲学の領土に執着することが人を「智恵への愛」から遠ざけることになり、逆に、哲学の領土にこだわらない人がむしろいっそう智恵らしい智恵に近づきうるという逆説をはっきりと認識するためである。すぐ後に述べるように、「ア・プリオリ」への問いは「智恵」への問いと密接に関わっている。従って、以上のような逆説を念頭に置きながら「ア・プリオリ」小史を試みることは、この概念が職業的哲学者たちによっていかに誤解されやすいものであるかを知らうとすることなのである。その誤解の例としてフッサール現象学をとり上げるつもりで

ある。しかし、だからといって、反形而上学である論理実証主義の方が「ア・プリオリ」の核心をつかんでいると言おうというのではない。論理実証主義によってもたらされたア・プリオリ観（「分析的なア・プリオリ」の立場）もまた、かつてカントが「ア・プリオリ」に期待したような方向での認識論的重要性をやはり担っているとは言えない。つまり、存在論的なア・プリオリも論理的（分析的）なア・プリオリも、いずれも智慧の理想からの撤退という性格を持っているのである。というのも、存在論というジャンルを措定する道も、言語の論理的分析を哲学の仕事と任ずる道も、「ア・プリオリな認識」というものを「アームチェア上の思索で得られる知」、つまり実験や観察をすることなく、思索のみによって得られる知とみなしているという点では、同類だからである。論理実証主義の中でも若干の特異性をもったシュリックを薄明かりとして、二十世紀的「ア・プリオリ」の二つの方向が持つこの問題点を浮き彫りにしてみようというのだ。

1、ア・プリオリな総合的認識と哲学

ア・プリオリな認識とは、経験に依存しない認識であり、従って（少なくともある時期までは）必然性の認識であると考えられていたものである。単に事実に関する知識を持つだけでなく、物事の連関の必然性を知ることこそは「智慧」ある人にふさわしい認識のあり方であるということは、古来哲学者たちの等しく認めるところであった。それゆえ、ア・プリオリな認識をどのようなものだと考えるかは、智慧とは何かという問題に関する各自の見解を反映する。特に、「ア・プリオリな総合的認識」の存在を認めるかという問題は、哲学や智慧に関する哲学者の見解の相違を識別する上でのよい目印である。ア・プリオリな総合的判断とは、ア・プリオリであり

ながらそれでいて経験の対象に関わる認識である。それは形式論理的な必然性の知ではなく、実在にかかわる必然性の洞察なのである。ひらたく言えば、ア・プリオリな総合的認識とは、「言葉の詮索ではなくて本当に中身のある智慧」ということだ。

元来、「ア・プリオリな総合的判断」という概念の提唱者であるカントは、この概念にそういう意味をこめた上で、哲学の与えうる智慧についての問いを立てたのである。こうして、「ア・プリオリな総合的判断はいかにして可能か」という問いが、「形而上学は可能か」という問いに答えるための前段階に位置づけられていたのであった。すなわち、批判哲学の後に来るべき本来の哲学的知について語るための、準備的問いだったのである。ただし、ア・プリオリな総合的判断の存在を認めることが即、形而上学の可能性を認めるということの意味するわけではない。数学の命題や自然科学の一般的原理（因果律など）をア・プリオリで総合的だと考える人も、（カント自身を含めて）存在するからである。しかし、それでもやはり「ア・プリオリな総合的判断」に関する立場の相違は哲学観の相違をよく反映していると言うことができる。

たとえば、フッサールは、ア・プリオリな総合的判断を認める。それは、彼が哲学という固有の領域をもつ学問の存立を強く要請し、かつ認めるということの、間接的な帰結である。現象学は、（個々の著者たちのその時々⁵の自己理解がどうあれ）形而上学の復興運動という性格を持っている。神や魂を論じはしないが、形而上学の主要部門である「存在論」に取り組む学問であることは間違いないからである⁶。そして、存在論は諸科学の基礎たる普遍的で根本的な諸概念の解明を行うものであるがゆえに、存在論を包含するところの哲学はア・プリオリな諸真理を対象とする、という考えにフッサールは立つ

ことになる。そして、哲学が論理学以上の何かあろうとし、実在に関する真理を得ようとする以上は、ア・プリオリな総合的判断をその中に含まねばならないのである。

他方、哲学に固有の領土を認めない論理実証主義は、「ア・プリオリな総合的判断は存在しない」というテーゼでもってその哲学観を表現している。論理実証主義の考えでは、実質的な内容をもつ学問的知見はすべて、自然科学部門にしる人文・社会科学部門にしる、何らかの実証性をもつ研究によって得られるものである。つまり、実験、観察、調査、史料研究等、経験的データを相手にする方法だけが実質的な知識をもたらすのである。そして、実証性を離れてもなお意味ある学問的命題を提供できるのは論理学と数学だけであると。要するに、ア・ポステリオリ（経験的）な命題を提供する学問とア・プリオリでかつ分析的な命題を提供する学問のみが学問たりうるものであると考えるのである。

このように、現象学と論理実証主義の哲学観の対立が、「ア・プリオリな総合的判断」に関する両者の対立に如実に表れているわけである。そして、見るとフッサール現象学がア・プリオリに関してはカントの問題意識の積極的な継承者であり、論理実証主義の方はこれを却下した側であるというふうに見える。しかし、事はそれほど単純ではない、ということを以下で論じたい。つまり、現象学に対するシュリックの次の批評には正鵠を射たところがある、と言おうというのだ。

「カントが彼のア・プリオリの概念を最も明瞭に境界づけ、また適用することによって疑いもなく挙げた大きな功績は、われわれの時代においては、とりわけ現象学者たちによって誤解され、またないがしろにされた。というのは、彼らは『ア・プリオリ』という語を全

然非カント的に使用し、そしてその後の新定義を捏造しているからである。」
(Schlick,1930b,p.20.邦訳145頁)

2、フッサールと「ア・プリオリ」

まずはフッサールの「ア・プリオリ」に関する見解を確認することから始めよう。その前提として、彼が哲学をどのようなものと考えていたかを知る必要がある。

2-1 フッサールの哲学観

現象学の構想を素描した『厳密な学としての哲学』（1910-11年）という書物の題名からも分かるように、フッサールは哲学がそれ固有の領域をもつ自立した学問である、しかも、論理学や数学と同じように必然的な真理を相手にする学問であるという意味で、個の「厳密な学」である、と考えている。つまり、ア・プリオリな真理を対象とする学問であると考えているのである。といっても、そのような厳密な学としての哲学は、これまでのところはまだ確立されていないのであり、哲学は昔から個々人の見解の終わりなき闘争の繰り返しでしかなかった（Husserl.1910-11,p.9.邦訳103頁）。今や、彼自身による基礎的な研究を通して、哲学は厳密な学として構築されてゆくための基礎を手にしたとされる。哲学のテーマと対象領域はどのようなものだとフッサールは考えているのだろうか。

少し遡って『論理学研究』第 卷（1900年）で表明されているフッサールの哲学的な問題意識を確認してみよう。「純粹論理学と認識論のための基礎づけ」がこの書物の課題なのであるが（序言）、この並置の仕方から分かる通り、フッサールの問題意識は主として二つの方面に関わっていると言うことができる。つ

は、「純粹論理学」の構想であるが、純粹論理学とはいわゆる形式論理学のことだけを指すのではなく、学問が学問であるための最も普遍的で形式的な諸条件を明確化するような学問、すなわち「学問論Wissenschaftslehre」と同義である。学問とは、単に事実はしかじかのようになっているということの知識ではなく、物事をその根拠から認識することである。つまり、物事が「必然的にそうなっている」ということの認識である。ということは、個々の真理が普遍的な諸法則から論理的に帰結するような、個の形式的演繹の体系を志向しているのではなくてはならない。フッサールの「学問論」はこうした形式的演繹の体系、すなわち理論的統一性のある知を一般に可能ならしめるような条件を究明しようというものである。それゆえ、この学問論すなわち純粹論理学自体が、さまざまな必然的真理を相手にするもの、すなわち、ア・プリオリな認識を求める学問であると期待されることになる。フッサールのこの構想は、過去の思想家に例を求めるとすればライプニッツの「普遍数学」の考えが最も近いものであり、フッサール自身が数学者として集合論や純粹数論を研究した経験からその実現可能性についての考えを抱懐したものにほかならない。

それゆえ、フッサールの言う「学問の可能性の条件」とは、カントの「経験の可能性の条件」よりも広い概念であることが分かる。カントの「経験の可能性の条件」が感覚を通して与えられる「リアルな」諸対象についての認識のその諸条件を指しているのに対して、フッサールの「学問の可能性の条件」は単に可能であるにすぎないような抽象的な対象についての理論をも射程に入れたものであり、五次元の空間であろうと複素数という数であろうと学問的理論の対象となりうるという考えに支えられている。学問上の諸概念が感覚的経験という地盤から離れ

て高度に抽象的で普遍的なものへと形式化されたことで、学問的思考一般の諸形式を自覚させるまでに根源的なものに迫ることになった、という意識を、フッサールは純粹数学の研究を通して抱いたわけである。

そうした最も抽象的で普遍的な形式的概念の典型は、「集合」であろう。解析学の例に見られる通り、今や、どんな学問でも、それが数学的な形式を与えられるに当たってはまず集合を対象として想定し、その集合に付与されたある種の特性を通して当該研究領域の本質が定義されるという形をとるようになった。「集合」のほかには、合理的学問的思考を規定しているさまざまな基本概念として、「命題」、「判断」、「推論」、「対象」、「事態」、「関係」、「単一性」、「数多性」などがある（LU, I, § 67）。こうした基本概念を総称して「論理的範疇」と呼ぶ。これらに関する本質的諸法則を叙述することが、「純粹論理学＝学問論」の主たる課題である。

しかし、以上のように純粹数学を参考にして合理的科学の基本概念と法則を体系化することだけが学問論のテーマなのではない。同時に、それらの概念の「起源」や「意味」に対する問い、そしてそれらの法則の「妥当性」に対する疑問が、フッサールの探求を動機づけているのである（序言）。それゆえ、学問論は「認識批判的な反省」を含まねばならない。すなわち、数学者が組み立てた諸理論を材料や参考にしながらも、理論一般の本質や諸概念の本質を洞察するという作業が、哲学者の仕事として要求されるのである（§ 71）。それは、ひいては数学や数学的自然科学が「妥当性」をもつことの原因を考える作業ともなる。だから、学問論を基礎づけることは認識論の基礎づけともなるというのである。これが『論理学研究』が携わる第二の方面、とりわけて哲学的な方面である。

では、諸範疇とその法則の「起源」、「意味」、

「妥当性」、「本質」等を知ること、言で言えばそれらの「現象学的起源」を知ること、いかにして可能となるのであろうか。『論理学研究』におけるフッサールの答えはあっけないものである。すなわち、われわれには現に本質を洞察する力がある、というのがそれだ。「イデアチオン」と呼ばれ、後には「本質直観」と呼ばれることになるこの知的機能を行使するとともに、そこに反省の目を向けてみること、それが現象学的起源という問題に答える道だというのである (LU, I, § 69)。

まとめて言うならば、『論理学研究』で説明されている限りでの哲学の役割とは、合理的思考およびその対象の諸「本質」を、現象学的起源を把握しながら叙述してゆくということになる。現象学は「本質分析」、「本質の洞察」の学である。その「本質」なるものが一つの豊かな対象領域をなして、なおかつ、それらの本質に知的に到達する信頼に足る方法が確保されている以上、現象学、すなわち哲学は、固有の領土をもつ一個の厳密な学問であると自負することができるというのである。

現象学が対象とする諸本質は、学問論が含む論理的諸範疇だけではない。中期以降のフッサールが、そうした諸範疇と相関関係に立つ「純粹意識」の領域に目を向け変え、そこに見出される本質的諸法則を記述することへと現象学の力点を移したこともよく知られている。現象学は今や、「対象」や「数」、「命題」等、合理的学問の諸範疇を論ずるだけでなく、「体験」の諸本質を論ずることになる。しかし、いずれにしても「本質」の分析を行う学である以上、現象はア・プリオリなものを扱う学問である。

それでは、「ア・プリオリ」ということをフッサールはどのように理解しているのだろうか。

2-2 フッサールにおける「ア・プリオリ」

「ア・プリオリな命題」とは、フッサールにあっては「必然的法則を言い表す命題」ということとほぼ同義である。ただし、物理的な必然性のことではなく、当該対象の「本質」からして必然的であるような法則のことが意味されている。「三角形には三つの辺がある」というような命題を考え見ればよいだろう。まして、ア・プリオリとは何か認識主観に内在する心理的性向に由来する必然性と捉えられてはならない。おそらくは後者のような誤解を避けるためであろう、フッサールは「ア・プリオリ」という語を極力使わないようにする、と『イデー I』で宣言するのである。「理念」という語をその代わりに用いるという選択肢もあるが、これもまた、カントが批判的に取り扱った「神」、「魂」のような超越的概念と混同されやすい。それゆえ、「エイドス (形相)」、もしくは「ヴェーゼン (本質)」という語を用いることにするというのである (*Ideen I*, p.6)。こうして、「ア・プリオリな命題」とか「ア・プリオリな真理」に相当する考えは、フッサールにおいては「本質普遍性」と呼ばれ、また、その具体的な例が「本質必然性」(つまり本質からして必然的に真であるような命題) と呼ばれることになる。たとえば、カントが「ア・プリオリな命題」と呼んだものの例、「すべての物体は拮がりをもつ」を、フッサールは一個の「本質普遍性」とみなすのであり、「形相的な妥当性をもつ」とか「純粹に形相的な」命題であるという言い方をするのである。そして、具体例において本質普遍性が特殊化されたもの、たとえば「この物体は拮がりをもつ」というような命題は、一個の「本質必然性」と呼ばれることになる (*Ideen I*, § 6)。以上の語法は、分析的な真理であろうと総合的な真理であろうと、ア・プリオリな真理を述べた命題全般に当てはまる。

このように、「ア・プリオリ」の代わりに「本

質的」、「形相的」と言うところから分かるように、フッサールの「ア・プリオリ」はカントの「ア・プリオリ」とは少なからず意味を異にしているのである。「ア・プリオリ」という言葉は、カントの用法においては、認識の源泉が非感覚的である場合のその認識様式のことを指している。だから、「ア・プリオリ」という言葉は、本来は「認識」とか「認識様式」という語に冠せられるべきもので、「真理」や「命題」といった語に冠せられるべきものではないと見るべきなのである。「ア・プリオリな真理」というのも、「ア・プリオリな仕方

で知られる真理」という言い方を縮めたものと言うのが正しい。カントの「ア・プリオリ」は認識論的な概念なのである。他方、フッサールは、もちろん認識論的関心をもたないわけではないが、その「ア・プリオリ」は、言うなれば存在論的である。つまり、何であれ問題となっている「対象」がもつある種の必然的連関を指しているのである。カントの「ア・プリオリ」が「ア・プリオリに」知るという過程に目を向けさせるという意味で副詞的であるのに対して、フッサールの「ア・プリオリ」は「ア・プリオリな」真理ないし法則を問題にしているという意味で「形容詞的」だと言ってもよいだろう。これらの法則は認識者の側の何らかの特性ではなく、「対象」の諸法則である。そして、「対象」とは、肯定的・定言的な命題の主語となりうるものすべてを指す。「この赤い色」も「赤色」も、「机」も「数2」も「音程C」も、そして「集合」も、すべて対象である。ただし、「赤色」とか「数2」といった一般的、抽象的概念に対応する対象が何か実体として存在しているという意味ではない。その意味で「プラトン主義的な実体化」に加担するものではないが(*Ideen*, I, § 22)、しかし、これらの概念が感覚的与件を整理するための便宜上のもの、言葉の規則的組み合わせにすぎないものであるとするような見解

は厳として退けられている(経験主義やマッハの実証主義との対立)。その意味で、フッサールの思想は普遍実在論的な思想である。つまり、イデア的なものを認める思想なのである⁶。

フッサールの「ア・プリオリ」のこの存在論的性格は、歴史的な系譜を回顧することによっても認識することができるだろう。フッサールの「ア・プリオリ」や「分析的真理」に対する見解は、ボルツァーノに始まるドイツ＝オーストリア学派の系譜を引き継ぐものであって、カトリックの聖職者でもあったドイツ＝オーストリア学派の始祖たちは、それぞれの仕方で反カント主義の立場を取ってきたのである。

現象学の出発点は、このように、本質普遍性というイデア的な真理を看取する態度によって特徴づけられている。「事象そのものへ」という現象学のスローガンも、それゆえ、実験や観察をせよという意味ではなく、むしろ逆の態度を推奨しているのだ。「先入見なしに」「事象そのもの」を見るならば、感覚的・物質的事象だけでなく、抽象的存在や普遍の本質などもまたれっきとした対象として、それら固有の必然的法則をもつものであることが分かるだろう、ということなのである。そして実際、自然科学の中には感覚的経験からの情報には帰着させられないような、そうしたイデア的真理も含まれているのではないか、と。典型的には、数学というイデア的(＝形相的)な学問の成果が含まれているのではないか、というわけである。以上からして、フッサールの「ア・プリオリ」を存在論と呼ぶことは許されるだろうと思う。

もちろん、認識論的な問題意識、もしくは「起源」に関する問題意識が、『イデーニ I』以降もっと掘り下げられていったことも事実である。実際、フッサールの「ア・プリオリ」すなわち「本質普遍性」は、理念的対象の諸法則だけを指しているのではない。現象学的還元によって開か

れた「純粹意識」の領域に見出される「体験の諸本質」もまた、ア・プリオリな真理である。それら体験の諸本質との関係の内に置くことで、合理的学問の諸概念・諸対象の「意味」が見えてくる、という期待をもった企てが現象学的還元なのであった。それでは、体験の本質を述べたア・プリオリな命題にはどんなものがあるのだろうか。以下のようなものがその代表的な例となる。「体験は内在的時間性という形式を備えた流れである」(Ideen I, § 81)、「意識は何ものかについての意識である」(§ 36)、「顕在的な体験は非顕在的な体験の庭に取り囲まれている」、言い換えれば「意識に不可分に帰属しているという地平というものが、そのつどの体験において 一緒に意味規定的なものとして働いている」(§ 35)、「空間的事物は常に射影という形で与えられ、決して十全な仕方では与えられない」(§ 41)、等である。

けれども、この種の法則が「先入見なき」まなざしで見取られたからといって、それのおかげでさまざまな学問的概念の「意味」が少しでもわれわれにとって明らかになるものであろうか。確かに、「体験」の構造との関連を示すことで学問的諸概念の意味に迫っているように見える研究も存在する。フッサールの弟子ベッカーの幾何学論は、ユークリッド幾何学の扱う「等質空間」がどのように「身体の自由な可動性」や(それゆえ)「他人の立場に立って世界を見ることが出来る」という人間自身の本質を理念的に表現しているかということ、比較的詳細に論じている(Becker, 1923, p. 458)。(同種の主張はフッサールの『イデーニⅡ』においてより簡略な形で提示されている。)つまり、学問というものが、知識の共有可能性、結果の再現可能性を根本理念とする営みであることを、幾何学を例にしてうまく説明してくれているのである。しかしながら、このようにしてそれぞれの学問

をその原点に立ち戻って把握しようとすることは、結局、当該の学問を実際にやること、そしてまた人類の学問の歴史をたどり直すことによってこそ、可能な事柄なのではないだろうか。

「意味」や「起源」への問いが実際に内容ある答えを手にするようになるためには、「純粹意識」の領域を見渡すのではなく、学問の歴史を自らたどり直し、人類が手足と頭をともに使いながら学問的理論を構成してきたその認識過程を追体験することが必要なのではないか。従って、フッサールの現象学が晩年において「発生的」、「歴史的」な視点を求めるようになったのは、必然的な流れであったように思われる。フッサール現象学において「ア・プリオリ」の探求が「意味」への問いと合致するようになり、認識論的な要求に応える可能性を持つようになるのは、「ア・プリオリな」命題をいきなり見出そうとせず、個別科学をその歴史的起源から改めて追体験する中で「ア・プリオリに」本質が見えてくるような、そのような過程に身を置こうという決心がつくときである。つまり、「副詞的な」ア・プリオリに関心が向かうようになるときなのである。

では、「副詞的な」ア・プリオリに関心を持つとはどういうことか。それは、結局のところは、実際に対象と関わり、五感から情報が入ってくるそのただ中で「本質に気がつく」という過程を経験すること以外にない、というのが私の考えである。そして、カントの「ア・プリオリで総合的」という概念が含んでいた最も大事な問いは、この「実際にやってみる」中で「本質に気づく」という過程をわれわれがいかに自覚的に惹き起こしうるかという問題だった、と主張したいのである。

この主張を裏づける 一つの間接的なやり方は、ア・プリオリな総合的「命題」を収集しようとするものの不毛さを示すことであろう。今ほど述

べたようにフッサール現象学の全体を不毛と言うつもりは毛頭ないが、そのあまりの迂遠さは、副詞的ア・プリオリではなく形容詞的ア・プリオリを選好するその体質に由来していると言うことができると思う。「ア・プリオリな総合的判断」についてのフッサールの考えを検討し、その問題点を考えてみよう。

2-3 フッサールにおける「ア・プリオリな総合的判断」

『論理学研究』「第三研究」11-12節では、ア・プリオリで分析的な命題とア・プリオリで総合的な命題の相違について、次のように説明されている。この相違は、それぞれにおいて問題となっている概念が形式的な概念であるか質料的な概念であるかの相違である。すなわち、「分析的命題」は、形式的な概念の法則を述べた命題として定義され、「ア・プリオリで総合的な命題」は、質料的な概念を含む命題で、なおかつ必然的な法則を述べているような命題であると定義される。形式的な概念とは、「事物 一般」に関する論理的諸形式で、すでに触れられた純粹論理学の諸範疇を指す。時に「論理的範疇」とか「形式的範疇」と呼ばれるものである。「或るもの」、「対象」、「性状」、「関わり」、「連繫」、「多数」、「基数」、「順序」、「全体」、「部分」、「大きさ」などがこれにあたる。他方、質料的な概念とは、何らかの特殊な対象領域に属する概念のことである。「家屋」「樹木」「色」「音」「空間」「感覚」「感情」などである。ある命題がこれら二種類のいずれの概念に関する命題であるかは、必ずしも字面だけからは判定できない。それはむしろ次のようにして判定されるのである。形式的なア・プリオリ命題（＝ア・プリオリな分析的命題）は、その中に登場する実詞を「あるもの」に置き換えても依然として真であるのに対して、質料的なア・プリオリ命題（＝ア・プリオ

リで総合的な命題）は、そのような置き換えによって真理性が損なわれてしまうのである。たとえば、「家が存在すれば家の諸部分も存在する」という命題は、「全体Gが存在するならば部分 α 、 β 、 γ も存在する」という 般的形式に書き換えても真理性が損なわれない。それはすなわち、この 般的形式で言い表されているのが 個の形式的法則であるということの意味する。このようなものが「分析的命題」と呼ばれるのである。他方、「同 の表面が赤くかつ緑であることはできない」という命題もまた、フッサールによれば 個の必然的な真理なのであるが、これを、色という対象領域への制限を取り払って 般的形式に書き換えることはできない。「同 の表面がFでありかつGであることはできない」というふうに書き換えると、F、Gの部分に代入される語いかにによっては真でないことがありうるのである。たとえば、「同 の表面が赤くかつ滑らかであることはできない」という命題は、明らかに偽であろう。それゆえ、「同 の表面が赤くかつ緑であることはできない」という命題は、色という対象領域に限定された真理を述べるものであり、それでいて必然的な真理を述べている。このような命題が「ア・プリオリで総合的な必然性」と呼ばれるのである。

ほぼ同じ考えが、『イデーニ I』第 篇第 章で述べられているので、こちらも参照しよう。そこでは、必然的な真理がいまや明確に二つの種類の「存在論」に分かれて帰属するとされている。一つは「形式的存在論」、もう一つは「領域的存在論」。そして、形式的存在論に属する命題がア・プリオリで分析的、領域的存在論に属する命題がア・プリオリで総合的であると定義されるのである。

形式的存在論は「対象性 一般という空虚な形式」に関わる諸法則を対象とする。それは、「性

質」、「相対的性状」、「事態」、「関係」、「同性」、「同等性」、「集合（集合体）」、「基数」、「全体と部分」、「類と種」などといった形式的範疇を扱う。形式論理学、算術、純粹解析、多様体論などの諸学科はこの種の存在論に属する学問として存立しているが、こうした分類を論ずるフッサール自身の叙述も形式的存在論に属するとされている。他方、領域的存在論は、具体的な諸対象が帰属する特殊な諸領域に属する本質普遍性を相手とする。物理的对象と心的対象の区別、さらには、色、音、などといったもっとも特殊な対象類型の区別を前提とした上で見出される必然的真理のことである。実在の空間を相手とするような幾何学は、それゆえ、一つの典型的な領域的存在論的学科であるということになる。物質的事物が属する空間と言う特定の領域に関する本質必然性を探究しているからである。かくて、「実在的な空間は三次元からなる」といった命題は、ア・プリオリで総合的な命題だと言われるのである。また、感覺的性質や感覺的对象に関する本質普遍性を述べた命題も、ア・プリオリで総合的である。たとえば「感性的性質は空間的拡がりなしにはありえず、空間的拡がりはまだ、常に、その上を覆っている何らかの感性的性質の拡がりである」とか、「強度という範疇に属する『増大』といった契機は、何らかの性質的内容に内在的なものとしてのみ可能である」なども、ア・プリオリで総合的な命題である（*Ideen I*, § 15）。これらは、言うなれば現象学が見出した独自のア・プリオリな総合的真理ということになる。

2-4 フッサールの「総合的ア・プリオリ」の問題点

以上のように見てくると、ア・プリオリな総合的判断に関するフッサールの見解は、認識論的な問題意識を失望させるものだと言わないわけ

にはゆかない。単純に言うならば、ア・プリオリで分析的な判断とア・プリオリで総合的な判断との差が、同じ「本質普遍性」の中における一般性の程度の相違に帰着させられているように見えるのである。もちろん、形式的存在論と領域的存在論の違いは、たとえば「動物」と「生物」の間にあるような普遍性の程度差とは異なった性質のものであるとされてはいる（*Ideen I*, § 13）。しかしながら、どちらも本質直観を通して洞察される本質的諸法則であるという点では同じであり、ア・プリオリで総合的な命題とア・プリオリで分析的な命題を獲得する認識プロセスに本質的な相違が認められていないのである。そして、さらに言うならば、幾何学の命題は別としてフッサールが独自の現象学的成果として誇る「質料的ア・プリオリ」の例が、当たり前すぎて実りあるとは思えない命題なのである。

以上の私の不満点は、「質料的ア・プリオリ」に対するシュリックの批判の論点とほぼ同じものである。シュリックは現象学派的「質料的ア・プリオリ」に対する不満を、まさに次の二点にまとめている（Schlick, 1932, pp. 230-231）。第一に、そもそもこうした命題の獲得が「いかにして可能であるか」の問いに対して実質的に答えられていないこと。本質直観によって見出される真理であるという説明は、説明の放棄に等しいということである。特に、本質直観がア・プリオリで分析的な命題とア・プリオリで総合的な命題とをともに支えている認識プロセスである以上、「ア・プリオリな総合的判断はいかにして可能か」というカントの問いは、フッサールにおいては固有の意義を失っているということになるだろう。もっとも、ア・プリオリな総合的判断を認めないシュリック自身の立場からしても、このカント的問いが立てられてはいないのであるが。第二に、現象学者の挙げるア・プリ

オリで質料的な命題はいずれも瑣末な真理であり、学問においても生活においても何ら出会うことのない命題であるという点である。総合的な命題であるのなら、それを耳にした人が「面白い。探求に値する」と思うはずではないか、ところが、「音は高さの度をもつ」とか「同表面が赤くかつ緑であることはできない」といった命題は、当たり前すぎて誰も問題にしないだろうというのである。実際には、これらの命題は総合的なのではなく分析的なのである、とシュリックは主張する。「同表面が赤くかつ緑であることはない」というのは、「色」という概念ないし言葉の使用規則を述べたものにすぎないというわけだ（Schlick, 1930b, p. 28. 邦訳 159-160頁）。

カントその人と立場は異なるものの、シュリックは現象学のア・プリオリとカントのア・プリオリの相違に適切に注意を喚起していると言える。シュリック自身の「ア・プリオリ」論を検討する前に、カントとフッサールの相違についてもう少し考えてみることにしよう。

3 エーバーハルトの後裔

フッサール現象学は、ア・プリオリな総合的判断を許容する思想ではあるが、カントとは甚だ異なった出発点からスタートしている。現象学その後の展開がどこかでカント的問題と再び出会う可能性がないわけではないが、この出発点の相違は決して小さくないのだ。すでに私は、カントのア・プリオリが認識論的、副詞的で、フッサールのア・プリオリは存在論的、形容詞的であると述べた。このような区別は、実は、カントが同時代人エーバーハルトと自分の考えの相違を説明する際の論拠を念頭に置いて私が提案するものなのである。私は、現象学の「ア・プリオリな総合的判断」は、少なくとも当初におい

ては、カントのそれではなくエーバーハルトのそれに近いと考えるのだ。そして、カントがエーバーハルトの派に対して憤激を隠さなかったという事実に、ア・プリオリ問題を考える上でのきわめて重要な鍵があると考えるのである。

エーバーハルトは、ライプニッツ＝ヴォルフ学派に属する論客であり、今や思想界の重鎮となったカントに対して、純粋理性批判など少しも新しくないという主張をぶつけたのであった。たとえば、ア・プリオリな総合的判断なるものが存在するという考えは少しも不思議なものではなく、何ら新しいものでもない。つまり、「もしも形而上学というものが可能であるとすれば、それはア・プリオリな総合的判断を含むものでなくてはならないだろう」というカントの要求は、とっくに満たされ、実現されているというのである。エーバーハルトの理解した分析的判断とア・プリオリな総合的判断とは、当時の形而上学の教科書の用語法にのっとって次のように定式化されるものだ。すなわち、「主語概念にとって本質的なもの (essentiale) を述語が述べている判断」がア・プリオリで分析的な判断であり、「主語概念の属性 (attributa) を述語が述べているような、必然的な判断」がア・プリオリで総合的な判断であると (Kant, 1780, p. 228)。「本質的なもの」が主語概念を構成する不可欠の成分を意味するのに対して、「属性」は、主語概念を構成するものではない。ただ、主語概念の内に根拠をもち、主語概念から帰結する事柄なのである。以上のような説明にもとづいて、たとえば「物体は拡がりをもつ」はア・プリオリで分析的、「実体は持続性をもつ」はア・プリオリで総合的だと言えることになるというのだ。これ以外に、「本質的なもの」でも「属性」でもないものを述べた命題もある。それらは「様態 modus」とか「関係 relatio」を述べた命題であり、必然的真理であるとは言えないので、ア・

ポステリオリな命題だということになるのである。

簡単に言うと、ア・プリオリな総合的判断とは、エーバーハルトの流儀に従うなら、本質的なものと本質外的なものとの中間に位置するような特性を述べた命題だということになる。「本質的なもの」とこの中間的なもの（属性）とを合わせて「本質essentia」と呼ぶのが、当時の教科書の考え方である。それゆえ、「ア・プリオリな総合的命題」とは、本質ではあるが、主語概念の内容を直接構成するものではないようなものを言い表した命題であると、と言い換えることもできる。

これへのカントの異論は、概略次のようなものである。属性を述べた命題がア・プリオリで総合的な命題でありうることを否定するものではないが、その属性がどのようにして知られたのかを論ずることなしには、ある命題が分析的か総合的かを言うことなどできないだろう、と。もしそれが矛盾律にもとづいて結論されたものにすぎないのであれば、たとえ属性を述べた命題であっても総合的とは言えず、分析的でしかないだろう、というのだ。問題はそれゆえ、「述語の概念が主語概念に対して構成的であるかそうでないか」という論理学的な相違よりも、その命題が「概念の分析」によってもたらされたのかそれとも「概念の外に出て」実在を検討した結果得られたのかという、認識様式の相違であるとカントは言うのだ。エーバーハルトは、結果としては「ア・プリオリな総合的判断」に相当する命題を口にしたが、「概念の外」に出てはいないのであり、それゆえ総合的ではなく分析的な認識の中にとどまっている、というのである。

「分析的」か「総合的」かの問いにおいて本当に重要な点は、命題の文法的・論理学的特性ではなく、命題を獲得するに至るプロセスの相

違にある。カント自身の論点が最初から、また貫してこのような明快さを持っているわけではないが、エーバーハルト派へのカントの怒りようを見ると、最重要の点がこの認識プロセスの相違にあるということは疑いない。

現象学の「ア・プリオリな総合的判断」は、このエーバーハルト流のアプローチと同質のものであるのではないだろうか。それはア・プリオリに認識するその仕方に二種類の決定的に違うものがあるという考えではなく、概念の文法的・論理的ふるまいの相違を相手にする態度ではないだろうか。確かに、本質直観を行使することはスコラ的な言葉の詮索とは違うのであり、言葉の外に出ることなのだとフッサールは強調している（Husserl, 1910-11, p. 26. 邦訳 124-125頁）。しかし、本質直観は分析的判断においても行使されているとされるのであるから、フッサールは分析的判断と総合的判断をプロセスの決定的相違において捉えようとはしていない、と言わねばならない。この態度が何を意味するかと言えば、言で言えば「アームチェアから立ち上がりたくない哲学者」である。カントはエーバーハルトの中に、シュリックは現象学の中に、そのような不健全な願望を見て取ったのではないだろうか。

なお、カントのエーバーハルト駁論は、分析的と総合的の区別に関して重要な疑問へと導く論理を含んでいることに注意を喚起しておきたい。それは、もしも命題を獲得するプロセス（手続き）がこの区別にとって重要であるのだとするならば、同じ字面の命題が分析的認識の成果だと言われる場合もあれば総合的認識の成果だと言われる場合もありうるということの意味するのだろうか、という疑問である。カントはそのようなケースがありうることを認めないわけではない、とだけここでは述べておく。少なくとも、エーバーハルト駁論におけるカン

トの論理は、そのような考えに道を開くものである。そして、同じ字面の命題が分析的とも総合的ともみなされることがありうるという考えは、デュエムやシュリックなど、後の科学哲学者たちが肯定する考えなのである。たとえば、落体の法則はガリレイが実験を通して見出したという点ではア・ポステリオリで総合的な命題であるが、ニュートン力学の公理から演繹される一つの定理であるという意味ではア・プリオリで分析的な命題だと言ってよいからである。いったん確立されて理論体系の中に組み込まれ、教科書の中に載っている命題は、分析的命題である。しかし、発見の過程を問題にするならば総合的（ただしア・ポステリオリ）である。ア・プリオリ問題にとって本当に重要なのは、出来上がった教科書の叙述の順序を吟味することよりも、教科書を作れるようになるまでのプロセス、すなわち経験から理論化へと進むこのプロセスの鍵はどこにあるのかと問うことではないだろうか。その種の真に認識論的な問題と取り組むためにも、字面でもって分析的か総合的かを決めるという姿勢からは解放されねばならないのである。

総合的ア・プリオリというアイディアは「命題」ではなく「プロセス」という場面に立つことで本当に意味をもつようになる、という私の考えに確証を与えるために、以下でシュリックの「ア・プリオリ」論を検討しよう。もしも、ア・プリオリな総合的「命題」を否定する思想の側に却って「言葉の詮索ではない中身のある智恵」へのヒントがあると示すことができるならば、私のこの考えは確証されることになるのである。

4 シュリックと「ア・プリオリ」

シュリックは何度となく現象学に向けて批判の矢を放っている（Schlick, 1918, § 12, § 18,

1930b, 1932）⁷。その論点は「本質直観」や「実質的ア・プリオリ」といった概念に向けられているのだが、根本的には、哲学観上の大きな隔絶を意識していたものと思われる。そこで、シュリックの哲学観をまず見ることにしよう。

4-1 シュリックの哲学観

シュリックは、フッサールとは正反対に、哲学が固有の領土も一つの学問であるという考えを否定する。そして、ア・プリオリで総合的な命題の存在も認めない。「哲学の転回」（1930）で彼は言っている。学問においても日常においても、観察と実験による以外に真理の確証を行うすべはない。日常生活の言明と経験科学の言明があわさって真理の全体系をなすのであるが、この体系の外側に「哲学的」真理の領域がなお別にあるわけではないのである。それはつまり、哲学は命題の体系ではなく、その意味では一つの学問ではないということだ。

しかしながら、だからとって哲学が偉大なものでないというわけではない。哲学はかつてと同様「学問の女王」と呼ばれてよい、とシュリックはすぐに付け加える。学問の女王それ自身も一つの学問であるべしなどとはどこにも書かれていないのだから、と。哲学は命題（認識）の体系ではなく、ある種の行為（Akt）の体系である。どのような行為かと言えば、「それによって諸言明の意味が確定されたり暴かれたりする、そういう活動Tätigkeit」である。あるいは、概念に対する「意味付与Sinngebung」の活動であるともされる。一般に学問は命題の真理性を検証するけれども、哲学は、さまざまな言明が何を言わんとするのかを明晰にし、また、さまざまな基本概念に意味を与える。しかるに、どんな学問においてもその「魂」はこのような意味を与える行為の内に宿るものである以上、「意味付与という哲学的活動は、一切の学問的

認識のアルファでありオメガである」(Schlick,1930a,p.35)、と。以上のように言うのである。

言明の意味を明らかにしたり概念に意味を付与したりする行為とは、どのようなものを指すのであろうか。カルナップと同じように「言語の論理的分析」を行うことで、意味を欠いた擬似命題を暴きだしたり、学問的言明の体系的連関を設定していく作業を指すのであろうか。そのようなことも当然意味されていると言える。けれども、さらに言われねばならないことが少なくとも二つある。

4-1-1 言語で言い表せないもの

つは、意味付与の活動は何らかの「言明」を与えることではありえず、究極的には実体験することを要求するような行為であると、シュリックが考えている点である。つまり、言語の論理的分析によって言明相互の関連を明らかにするということだけでは十分ではないと考えられているのである。ある言明が何を意味するのかを別の言明で説明したとしても、その別の言明の中にまた、新たに説明されるべき言葉が含まれていることであろう。言葉を重ねるだけでは意味の付与(ないし解明)は完了しないのである。究極的には「これがそうだ」という指し示しを行うしかない。つまり、直示、提示である。「最終的な意味付与は、従って、いつでもさまざまな行動*Handlung*を通して生起するのであり、哲学的活動はこうした行動からなるのだ。」

(*ibid.*, cf.Schlick,1932,pp180-181) もちろん、言葉で説明できない体験の中に黙してとどまることが求められているのではない。逆に、明確な論理形式をもつ表現をそこから構成してゆくことがなくては、体験内容は認識に貢献したとは言われぬのである。シュリックが好んで挙げる例は、学問的認識を新たに構成したり刷新

したりした人の行為である。アインシュタインは、それまでの物理理論と整合しない実験結果を前にし、思い切って時間と空間の概念に新しい意味を与えることになるような理論を構築した。また、その際「同時性」とは何を意味するのかが、同時性を確かめる手段の提示によって明らかにされている。このような連の行為は哲学と言ってよいものだ、というのである(Schlick,1930a,p.36; 1932,p.247)。こうして、シュリックの言う意味付与活動は、直接体験(直示や検証)の行為と構造化された論理的表現の間を往復することに関わっていると思われる。このような意味でならば、一般に、どの学問においても基本概念の意味を明らかにする人は、哲学をやっていると言えるというのである。「賢者」と呼ばれる人もまた、人生に関わる諸事実や諸関連の「意味」を人よりも明晰にすることができ人のことなのである。いずれにしても、シュリックの言う明晰化や意味付与とは、言語の論理的分析に尽きるものではないという点に、注意しなければならない。

4-1-2 検証という行為の喜び

第二に、上の論点と密接に関わることであるが、学問的言明の体系はつきつめてみればすべて仮説なのであって、各自の新たな現在の経験によって確証し直されたり、刷新されたりするものであるということをシュリックは強調する。シュリックの言う「哲学的活動」は、それゆえ第一義的には、体系の構築・整備のための分業の特定部分を受け持つということではなく、個人の中で既に十全な形で進行しているのだから意味のないような行為を言うのである。学問と認識に関するシュリックの見解はこの種個人主義的と言うべき色合いによって(Friedman,2000,p.18,n.22)、カルナップのそれと異なってくる。『世界の論理的構築 (*Der*

『*logische Aufbau der Welt*』が自覚的に建築の
比喩を用いていることから分かるように
(Carnap,1928,p.xv)、カルナップの大きな関
心は諸概念の論理的・階層的な連関の明確な体
系を描き出すことであった。それがまた、統
科学という実質的な学問体系への準備ともなる
わけである。このような作業が、彼にとっては
「認識論的」な仕事であったのである (p.xiii)。
他方、シュリックは建築物 (Bau) にはあまり
関心をもたず、学問的知識の「仮説演繹的体系」
としての動的アスペクト (Schlick,1932,p.204)
の中で、直接経験と論理的諸表現との関連を論
ずることを認識論的問題と捉えている。

それゆえ、「認識の基礎について」(1934)で
述べているように、シュリックにとって認識の
「基礎」に対する問いとは、絶対に確実な命題
を手にし、それを基礎にして知の体系を作ると
いうことではない。つまり、命題の真理性や妥
当性について哲学者が認識論という学科の中で
究極的な基盤を与えてやるということが問題な
のではないのである。命題の真理性や妥当性
という点で言うならば、すべての記録された命題
は仮説でしかない。自分自身の過去の経験の記
録や記憶でさえも、現在の時点からみれば仮説
である。(記憶違いの可能性があると意味で。) 重要なことは、こうした仮説の体系がその
つどの直接経験によって改訂をうながされたり
検証されたりする、このプロセスが動いている
ということである。それが、すなわち、認識が
基礎づけられているということなのであり、認
識が現実と揺るぎない接点をもっているとい
うことなのである。

この直接経験のことをシュリックは「観察命
題Beobachtungssatz」、もしくは「直接的確証
Konstatierung」と呼んでいる。命題と呼ぶこ
とが本来不適切だからである。「直接的確証」に
は二つの機能がある。一つは、それが刺激とな

って何らかの仮説をわれわれが抱くようになる
ということである。この仮説同士が論理的に関
連づけられ、理論が形成されるや、そこから何
らかの予言が引き出されることであろう。その
予言が的中したかはずれたかを知らしめること、
すなわち検証をもたらすことが、直接的確証の
第二の機能である。直接的確証は命題体系の「基
礎Fundament」とか「根拠Grund」とか呼ばれ
るものでは到底ありえない。なぜなら、直接的
確証はそこから諸命題が論理的に演繹されるよ
うな前提といったものではないからである。そ
れは、刺激と検証という形で絶えず仮説の体系
に関わり続けることでのみ役割を發揮するもの
でしかない。

直接的確証によって現実と接点をもつことは
また、学問というものの意義を自覚する上でも
重要である。学問の意義は、もちろん当初は、
この世界の中でわれわれが生きていくうえで
「勝手に分かる」ようにするというその実用性
にある。けれども、学問はまた、その実践過程
に内在する充足の喜びのゆえに、いわば過程自
体に目的が内在する活動となるのである。すな
わち、予言が的中したことの爽快な喜びの中に、
学問の本質的なものがあるのである。シュリッ
クのこの考えは、「人生の意味について」(1927)
などで既に開陳されていた彼の人生観の 一
系であると言ってよい。人生の意味は、生存を
維持するための労働が目指しているであろう何
かの目的の中にあるのではない。なぜなら、労
働の目的とはほかならぬ生存することであって、
生存することそのものが何のためであるのかを
説明するものではないからである。そうではな
く、人生の意味がもしあるとするならば、それ
はある種の活動がそれ自体としてもつ喜びの中
にあると考えるほかない。そのような活動とは、
言で言えば「遊び」である。「労働」は労働に
よって得られる結果のゆえに意味をもつのであ

るが、遊びはそれ自体が目的である。もちろん、遊びにおいても結果を真剣に追求することが前提ではあるが、その真剣な追求の喜びそのものによって既に報われているような活動なのである。職人仕事、学問、芸術的創作活動、こうしたことはやりようによってはいずれも遊びとなりうる。そして、さまざまな活動を遊びとなしうるのは「若さ」である。この若さを維持することが人生を喜ばしいものにする鍵となるであろう、というのだ。論文「認識の基礎について」でしきりに強調される直接的確証の喜びもまた、それが遊びの一種であり、人生の意味を構成する一つの可能性であるからにはかならない。そして、智恵の愛好者たる哲学者の探究の眼目は、学問におけるこの直接的確証がもつ、認識と喜びの源泉としての機能を見定めることにあるのである。それゆえ、検証の行為そのものは諸科学の任務であると言われたけれども、検証（直接的確証）の喜びを知らない者は哲学行為を行えないということになろう。

「直接的確証は決して学問の根拠をなしているわけではない。そうではなく、それら直接的確証にいわば認識という火がちろちろと燃えつき、どれにでもただ瞬の間取りついては、ただちにそれを燃やし尽くしてしまう、そして新たに燃料と勢いを得ては再び燃え上がる、という次第なのである。こうした充足と燃焼の諸瞬間こそが本質的なものなのだ。これらの瞬間から認識のすべての光が発出する。そして、この光こそが本来、すべての知の基礎を求めるときに哲学者がその根源を問いたずねる当のものなのである。」

(Schlick,1934,p.453)

以上から既に明らかな通り、「哲学は行為である」というシュリックの主張は、究極的には個

人の中で十全に遂行されるべき行為のことを念頭に置いたものである。それは、学問的分業（命題体系の構築と整備に関する共同作業）の特定部門を職業的哲学者が担うというような考えから距離を置いたところにある思想である。このように領土的保身を離れた哲学観において、そして、認識の過程そのものを重視する思想において、「ア・プリオリな認識」にはどのような意義が与えられるのだろうか。それを次に見ることとしたい。

-
- 1 Prof.Dr.Austriacus, “Der Fall Wiener Professors Schlick eine Mahnung zur Gewissenserforschung”, in *Schönere Zukunft*, 12.7.1936. この記事は Stadler (1997)に採録されている。なお、唯物論や「退廃的」文化潮流をユダヤ人とフリーメーソンのせいにするこの記事の姿勢は、言うまでもなくヒトラーの主張を譲り受けたものである。
 - 2 当時のウィーン大学教授、ディートリッヒ・フォン・ヒルデブラントの声明。Stadler,(1997)に採録されている。
 - 3 Kusch, (1995)は、大学における心理学と哲学の一種の勢力争いを例にとりながら、世紀初頭のドイツ語圏哲学文献の中に科学との差異化への意志を跡づけている。そして、この著者によれば、第一次大戦後に心理学と哲学の闘争は哲学（具体的には現象学と生の哲学）の勝利をもって収束するのだが、それは、(1)第一次大戦時に民族精神の自覚にもとづくドイツ人の団結に対する要求が高まったこと、(2)ワイマール時代の「反科学的心性」、これら二つの要因にバックアップされてのことであったという。また、ワイマール時代の反科学的心性をよく表す一つの事実としては、シュベングラの『西洋の没落』が第一次大戦直後に公刊されるや、ベストセラーになったことが挙げられる（以上、Kusch,1995,ch.8）。ちょうど同じ頃、マックス・ウェーバーが講演「職業としての学問」（1919）で、学生たちが学問の客観性志向を厭って「体験」と「個性」を求める風潮に言及しているのも、同種の心性の存在を裏書している。
 - 4 フッサールは、ユダヤ人であったためではあるが、ナチスから迫害される側であった。
 - 5 フッサールは、『イデーニ I』第一篇第一章 10 節注で、

「対象一般についてのア・プリオリな理論」を言い表すのに、『論理学研究』では慎重に避けていた「存在論」という言葉を今や採用することが適切であると宣言している。

- 6 アイデア的なものを認めるという意味では、フッサールの立場を観念論 (Idealismus) と呼ぶこともできる。「観念論という言葉は、ここでは形而上学説を意味するのではなく、アイデア的なものを客観的認識一般の可能性の条件として承認し、心理学主義的に解釈しさらなない認識論の形式を意味する。」(LU,II 1,p.108.『論理学研究 2』120 頁。)
- 7 フッサールの方は、1920 年 10 月の文章で、現象学に対するシュリックの無理解と曲解を非難している。「多くの著者たちがいかに安易に侮蔑的な批判を行っているか、いったいどの程度誠実に[私の著書を]読んでいるか、そしてまた彼らが、私と現象学に対してどれほどナンセンスな曲解を押しつける厚かましさを具しているか、そのことを示す一つの実例は、モーリッツ・シュリックの『一般認識論』である。」(LU,II 2,2 Aufl.,p.6.『論理学研究 4』6 頁。若干訳文を改めた。)

<参考文献>

Becker, Oskar, (1923), *Beiträge zur phänomenologischen Begründung der Geometrie und ihrer physikalischen Anwendungen*, in *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Band 6, Halle Verlag von Max Niemeyer.

Carnap, Rudolf, (1928), *Der logische Aufbau der Welt*, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1998.

Carnap, Rudolf, (1932), “Überwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache, in *Erkenntnis*, 2. カルナップ「言語の論理的分析による形而上学の克服」、『カルナップ論文集』内田種臣ほか訳、紀伊国屋書店、1977、2003 年。

Friedman, Michael, (2000), *A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and Heidegger*, Open Court, Chicago and La Salle, Illinois.

Gadol, Eugene T., (1982), “Philosophy, Ideology, Common Sense and Murder – The Vienna of the Vienna Circle Past and Present”, in Gadol, Eugene T.(ed.), *Rationality and Science: A Memorial Volume for Moritz Schlick in Celebration of the Centennial of His Birth*, Springer Verlag, Wien, New York.

Husserl, Edmund, (1900 1901), *Logische Untersuchungen*, I (2Aufl.1913), II 1(2Aufl.1913), II 2(2 Aufl.1921), Max Niemeyer Verlag, Tübingen. フッサール『論理学研究』

立松弘毅他訳、みすず書房、1 4、1968 1976 年。LUと略す。

Husserl, Edmund, (1910 1911), *Philosophie als strenge Wissenschaft*. hrsg.von Wilhelm Szilasi, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1965.フッサール『厳密な学としての哲学』、『世界の名著 プレンターノ フッサール』中央公論社、1970 年、所収。

Husserl, Edmund, (1913), *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch*, hrsg.von Karl Schuhmann, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, Boston, London, 1995. フッサール『イデー I』渡辺二郎訳、みすず書房、1、2、1979 1984 年。Ideen I と略す。

Kant, Immanuel, (1780), “Über eine Entdeckung nach der alle neue Kritik der reinen Vernunft durch eine ältere entbehrlich gemacht werden soll”, in *Kants Gesammelte Schriften*, Bd.VIII, hrsg. von Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaft, Berlin.カント「純粹理性批判の無用論」福谷茂訳、『カント全集 13』岩波書店、2002 年。

Kusch, Martin, (1995), *Psychologism, A Case Study in the Sociology of Philosophical Knowledge*, Routledge, London.

Schlick, Moritz, (1918/1925), *Allgemeine Erkenntnislehre*, 2.Auf., repri in Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1979.

Schlick, Moritz, (1927), “Vom Sinn des Lebens”, tr.,”On the meaning of life”, in Schlick,(1979),vol.II.英訳から引用した。

Schlick, Moritz, (1930a), “Die Wende der Philosophie”, in Stöltzner & Uebel, (2006),

Schlick, Moritz, (1930b), “Gibt es ein materiales A Priori?”, in Schlick,(1969). シュリック「事実的ア・プリオリは存在するか」竹尾治一郎訳、坂本百大編『現代哲学基本論文集』、勁草書房、1986 年。

Schlick, Moritz, (1930c), *Fragen der Ethik*, repri. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1984. シュリック『科学としての倫理学』城戸寛訳、亜紀書房、1980 年。

Schlick, Moritz, (1932), “Form and Content, an Introduction to Philosophical Thinking”, in Schlick,(1969).

Schlick, Moritz, (1934), “Über das Fundament der Erkenntnis”, in Schlick, (1969).

Schlick, Moritz, (1969), *Gesammelte Aufsätze:1926 1936*, Georg Olms Verlag, Hidesheim.

Schlick, Moritz, (1979), *Philosophical Papers*, vol.I (1909 1922), vol.II(1925 1936), ed.by Henk L. Mulder and Barbara F. B. van de Velde Schlick, transl.by Peter Heath,

Wilfrid Sellars, Herbert Feigl and May Brodbeck, D.Reidel Publishing Company , Dordrecht, London, Boston,1979.

Stadler, Friedlich, (1997), "Die andere Kulturgeschichte am Beispiel von Emigration und Exil der österreichischen Intellektuellen 1930-1940", in Michael Gehler & Rolf Steininger, (hrsg.), *Österreich im 20. Jahrhundert. Ein Studienbuch in zwei Bänden. Von der Monarchie bis zum Zweiten Weltkrieg*, Wien, Köln, Weimar, 1997.

Stöltzner, Michael & Uebel, Thomas(2006), *Wiener Kreis*, Philosophische Bibliothek, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 2006.